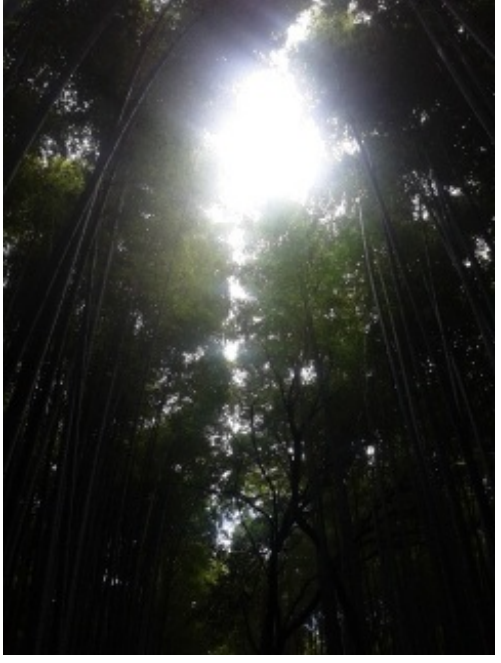

洞窟だ。その前には、神飾りがある。思わず手を合す。病院の中庭にそびえる大木には、木の中に腐ったのか、虫に食われたのか、大きな穴が開いており、その中に、誰が置いたのか、おもちゃのような小さな朱の鳥居が飾られている。その朱も、長い年月を経たのか、ところどころが欠け、木がむき出しになっている。また、その鳥居の前には、誰が置いたのか、今は使われなくなった硬貨や石が積み重ねられている。もちろん、その誰かとは、自分たちの先輩、あの病院で匿われ、生きてきた男性たちだ。将来や未来が見えず、ただ命をつなぐためだけに生きてきた先輩たち。

　俊彦も同じ境遇であることから、散歩の合間に、必ず、木の幹の穴に手を合わせてきたのだ。だが、この洞窟はそれよりも大きい。人が入れるぐらいの大きさだ。中も深そうだ。ここなら隠れるのに適している。だけど、この中にも、自分たちと同じように、誰かが入ったのだろうか。

　暗い。電気がない。当たり前だ。この洞窟には電気はない。照明機器もない。これまでの自分たちの生活と全く逆の生活だ。全てが人類知能の下で管理され、常に、ママドローンが日常生活に支障がきたさない様に全てを手配していてくれる。その世界とは真逆の世界だ。だけど、だからこそ、その管理から逃れるために、彼と一緒にその世界から逃げ出してきたのだ。当然、それに伴う、不便や不利益は甘んじて受けるつもりだ。何かを得るためには、何かを失なわなければならない、すなわち、自由を得るためには、これまでのようなぬくぬくとした生活はいらない。失うのでなく、自分たちの意思で切って捨てるのだ。ここが、あたしの、あたしたちの最終目的地だ。

　ここでようやく、彼女とゆっくりと話ができる。ここならば、あの忌まわしい、と言いながらも、自分を育てくれたドローンはいない。ある意味でせいせいするものの、複雑な気持ちだ。だけど、もう、後には戻れない。この暗闇の中を進むしかない。その暗闇の中に足元を照らす幽かな明かりを求めるのだ。多分、自分たちの未来も同じなのかもしれない。

「俊彦さん」

あたしは俊彦さんの名前を呼んだ。ようやく余裕を取り戻せたのだ。いや、取り戻したふりをした。ここから、あたしたちの未来が始まるのだ。笑顔だ。どんなに暗くても、笑顔があれば未来は明るいはずだ。

ごつごつした石の上に座る。座りごこちが悪い。不安定だ。それに、お尻に突起物が当たる。でも、それが、かえって、自由を実感できる。痛みが生を感じさせてくれる。俊彦さんもあたしのすぐ隣の石に座った。

左手を伸ばす。俊彦さんの指に触れた。手の甲にも触れた。温かい。洞窟の中がひんやりとするので、よけいに温かく感じる。また、座った石が冷たいだけに、かえって、人の体が温かく感じられる。人は熱を発している。つまり、生きているということなのだ。あたしの左手は俊彦さんの右手の上から覆う。指と指との間にあたしの指を滑り込ませる。二つの手は堅く握り締められた。もう離れることはない。この生きている時間を大事にしたい。

ようやく、ここが安住の地だ。やっと、ゆっくりと彼女と話ができる。でも、このあたり一帯では、警察や警備のドローンたちが、僕たちを探しているのだろう。ここも見つかるのは時間の問題だ。見つかったらどうなるのか。奈保子さんは女性なので、これから子どもを産むことになるだろうから、処分されることなく元の生活に戻れるだろう。そう、彼女は生産性があるのだ。だけど、僕は男性だ。僕の代わりはいくらでもいる。

正確には、僕以外の精子は大量にある。僕は生産性はないのだ。そうなると、処分されるしかない。それでもいい。今までだって、あの男性だけが住む病棟で精液を供給し続ける家畜として一生を送っても、いつかは死を迎えるだけだ。それなら、束の間だけど、憧れの、憧れ続けてきた女性と最後を迎えた方が、僕の人生が豊かだったのではないか。

「あら。これは。何？」

奈保子は足下にある小さなマッチ箱大の、薄汚れた黄色い箱を見つけた。マッチと言ったものの、この時代にはマッチなんて使わない。木をこすり合わせ、枯れ草に火をつけるぐらい昔の遺物ではないか。奈保子はマッチの実物を知らない。風俗図鑑かなんかで知ったぐらいだ。でも、本当にマッチなのか。奈保子は小箱を拾った。表面の埃を指でなぞる。そこには、あざやかなレモン色が浮かび上がってきた。

「それは、何」

　俊彦が奈保子の手のひらの箱を見つめる。

「マッチ箱じゃないかしら」

「この時代に、マッチなんて作っているのかなあ」。

　俊彦もたまたまネットサーフィンで時間をつぶしていた時に、マッチやマッチ箱を見たことがある。細い木の軸の先端に赤い頭。たかがそれだけれど、一瞬、手足を奪われ、自由に病院の外を出歩くことができない自分のように思えた。その記憶が、その感情が思い出された。

「ここは、神社だから、線香やろうそくに火を点けるために、今も使うんじゃないの」

「でも、僕たちがやらなくても、ドローンたちが火を点けてくれるよ」

「神様への祈りだもの。自分でやらないと、ご利益がないんじゃないの。それに、ここ神社はドローンは禁制なのよ」

「全能のドローンにも不可能なことがあるんだ。でも、御利益なんてあるのかなあ」

　俊彦はふっと笑みを浮かべた。昔の人間たちは、正月や大学入試などの時に、神頼みをしたらしい。この人類知能が人間取って代わって支配している管理社会で、神様のご利益なんてあるのだろうか。今は、神ではなく、人類知能頼みではないのか。そう、人類知能が神なのだ。

「あるわ」

　俊彦の言葉に奈保子が反応する。

「この社会だからこそ、人は信仰を求めるのよ。あたしだって、あなたに会えるよう、あらゆる手段を尽くすとともに、毎日、お祈りをしてきたわ。そのご利益が今なのよ」

「それは僕も同じだ。奈保子さんとこうして一緒にいるために、どうしたらよいか、あれこれと案や手法を考えてきたんだ。それは祈りに通じるかもしれないね」

　奈保子と俊彦は互いの顔を真剣に見つめる。

「あら。こんなところにも。それも二つある」

　奈保子は俊彦の足下にも、うす汚れた黄色い箱を見つけた。

「本当だ。並んで置かれているようだね」

「ここだけじゃないわ。あそこにもあるわ」

　奈保子は洞窟のあちこちを指差す。目が暗闇に慣れてきたのか、明かりがなくても洞窟の穴の中が見渡せるようになってきた。

　奈保子の指の先には黄色い箱が対のように落ちていた。いや、本当に落ちていたのか。意図的に置かれたものか。とにかく、偶然に、並んだものではないように見えた。

　その数、ひい、ふう、みい、と十組以上はあった。ほとんどが埃をかぶり、一見、土と同化しており、見分けがつかない。一番、新しいのが、菜穂子たちの足下にあった箱だった。やはり、これは偶然ではない。その箱を黙ったまま、しばらくみつめる二人。

「まるで、あたしたちみたい」

　奈保子がふと口に漏らした。

「最後まで、一緒にいられたらいいね」

　俊彦が奈保子の手を再び、強く握りしめる。

「あなたに本当に会えてよかった」

　奈保子は箱から目を転じ、俊彦の横顔を見つめる。凛々しい顔だ。今更ながら、胸の高鳴りを覚える。

「僕もだよ」

　視線を感じたのか、俊彦が奈保子の方に顔を向けた。互いの顔が正面を向く。

「女と男が別々に暮らす世界を変えないといけないわ」

「僕もそう思う」

「人類が人類を守るために生み出したドローンが、人類知能がその人類を分断しているのよ」

「それなら、僕たちがこの世界を変えるしかない」

　その時だ。洞窟の天井の一部が明るく光った。太陽の光の反射だ。その光は洞窟の入り口の方から差し込んできていた。

　ドローンだ。この神の森に差す木漏れ日を受けて、表面が鏡のように光ったのだった。

　息を飲みながら、奈保子が呟いた。

「あたしたち、包囲されているわ」

　だが、その言葉に恐怖心はなかった。

「なぜ、僕たちの居場所がわかったのだろう」

　俊彦は様子を見ようと洞窟の入り口の方に進もうとするけれど、奈保子がその手を引っ張り、元の場所に戻らせた。

「わからないわ。存在確認のブレスレットは処分したはずなのに。でも、体温や体臭など、人間の痕跡なんて、捜そうと思えばいくらでも探せるわ」

「何しろ、相手は優秀な刑事ドローンたちだからな。ベストセラーの推理作家たちが書いた探偵小説や警察小説から、犯人を捜すための方法は分析済みだからな」

　ようやく、俊彦にも余裕が出てきた。

　二人は最後の時だと、認識していた。

　互いに洞窟の外を見ていた。同じ方向を見ていた。そこには、木の葉の隙間から太陽が沈もうとしているのが見えた。赤い、赤い夕陽だった。

「まるで、あたしたちみたい」

奈保子が先ほど同じ言葉を呟いた。

「でも、太陽は明日も昇るよ」

俊彦は改めての奈保子の左手を右手で強く握りしめる。

「僕たちは永遠に一つだ」

「ママはどこかな」

奈保子は目を細めて、数多くのドローンの中に顔見知りのドローンを探した。

「パパもどこかな」

俊彦もパパの姿を求める。

「消されちゃったかな。あたしたちのせいで」

「これまで育ててくれたのにね。僕たちは親不孝だね。でも、さあ、行こう」

俊彦が前を向く。

「いつまでもここにいても未来はないよ」

「どこに未来があるの？」

奈保子も前を向いた。

「一歩先だよ」。

「そうね。前にしか未来はないわね」

二人は洞窟の入り口に出てきた。そこには、招かれざる客を歓迎するかのように、無数のドローンたちが空中で浮遊していた。

「あたしたちがここに隠れていたことはわかっていたんだ」

あきらめのような、ほっとした気持ちの奈保子。

握り締めていた右手をはずし、奈保子の右肩を抱く俊彦。二人の距離は更にちじまった。

「奈保子」

「俊彦」

二人の前に、警察ドローンたちを押しのけるようにして、２体のドローンが突然現れた。

「ママ」

「パパ」

奈保子と俊彦の口から同時に言葉が漏れた。そのドローンは、奈保子のママドローンと俊彦のパパのドローンだった。同じような形のドローンだが、長年一緒に暮らしたせいか、一目で見分けが付いた。

「会えてうれしいわ・・・」

「私もだ・・・」

二つのドローンはその先の言葉を続けることができなかった。二人もそれぞれの二つのドローンを見つめ返した。